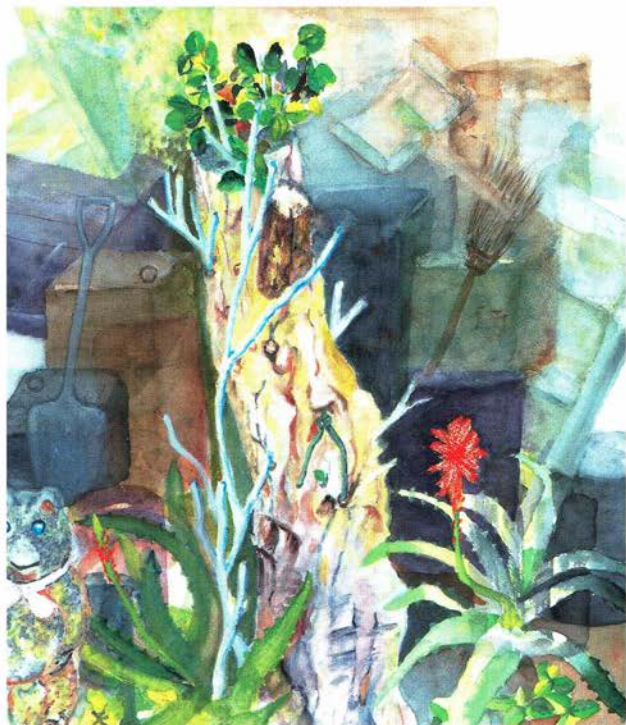


村野次郎創刊

# 香蘭



2021年(令和3年)4月号

第98卷

第4号

通卷1084号

二〇二一年(令和三年)四月一日発行(毎月一回一日発行)

香蘭

第九十八卷第四号



# 香 蘭

2021年(令和3年)4月号  
第98巻 第4号 通巻1084号

## 目 次

村野次郎作品 私の愛誦歌(68) ..... 石井雅子：表二  
作 品 ..... 一 ..... 25

三 ..... 33

推薦香蘭集 ..... 39

香 蘭 集 ..... 40

近詠十五首 寒い朝にも ..... 柏原陽子：2

作品一特選(二月号) ..... 朝香・石井・伊藤(美)・伊藤(康)・岩田・岡野・齋藤(俊)・鈴木(桂)・中村(か)・西野・宮原：18

作品二・三特選(二月号) ..... 江口・小原・竹本・牧田・松沢・大島・篠永・田中・田村・安田・渡邊(典)：20

村野次郎への旅(番外編) ..... 千々と久幸：22

歌の生まれる場所(99) ..... 丸山三枝子：24

エッセイ・自由研究 草競馬 ..... 伊藤美恵子：44

焦 点(二月号) 小さな発見や気付きから生まれた歌 ..... 満木好美：46

七 首 抄(二月号) ..... 柏原(恵)・奥田・杉山(伊)・中島(由)：48

相川公子「富弘美術館」評(二月号近詠十五首) ..... 市川義和：49

作 品 評(二月号) ..... 香山静子：50

作品二 ..... 中村かよ子：52

作品三 ..... 市川義和：54

香蘭集 ..... 中井房江：56

文法あれこれ(23) ..... 田中あさひ：58

緑 地 帯 ..... 安藤(経)・竹本・市川：60

歌集管見 久我田鶴子歌集『雀の帷子』評 ..... 桜井京子：62

歌会及び会合・会員消息・他 ..... 63

編集後記・新宿日記 ..... 66

表紙絵 ..... 中村 陽子「おしゃべりな木」 目次・緑地帯カット ..... 和田和雄：表三

つぎつぎに層なす光ゆらぎつつやまの泉の

湧きあがりくる

『高尾山歌碑』

この歌は香蘭原稿用紙の表紙に載っている三首のうちの一首で、原稿用紙では「次ぎ次ぎ」となっている。毎月のように見ている私には自然詠のお手本であり好きな歌である。

湧きあがる泉の水の上に立ち上がる透明な空気をゆらぐ光として捉えた感覚が繊細で美しく、爽やかで新鮮な感動を覚える。

私は香蘭入会以前に高尾山登山道で歌碑を見かけたことがあり、印象深いものである。

今回、この歌を村野先生の歌集に探しても見当たらず、市川さんにお調べいただいたところ平成二十五年十月号（九十周年特集号）で高尾山歌碑の写真とともに門倉選者の解説で、この歌は歌集や雑誌にも未発表であると載っていた。歌碑は昭和五十七年に建立され碑歌は高尾山そのものを詠んだ歌ではなく根府川石に肉筆を彫るため、短冊の中から山に関する作品を選定したということである。

（歌集には収録されていない）

## 四 選 者 の 作 品

歳末の風

平塚 千々和 久幸

年の瀬を仲町行きバスに乗る知らない街の人恋しくて  
コロナコロナコロナ苦いか塩っぱいかそが上に熱き呪詛したたらす  
マスクにて顔を覆えばどの人も涼やかな目を見せて道行く  
さあ行くかうイルスオフを首に吊り歳末の街へ漂い行けり  
日溜りに寒梅ひらく存えてこののちわれによきことありや  
とりとめもなき話して昼間より酒を飲みおり古き友来て  
富士の絵のある銭湯に浸かりつつ期末試験に苦しみし日よ  
朝の雲窓に確かめ病棟の妻の容態案じて今日も

冬 薔 薇

我孫子 丸山 三枝子

生日に賜りし薔薇十六本 冬のリビング占めてかぐわし  
肉厚の花びらを解く大輪の深紅、うす紅、黄の冬薔薇  
うずまきの花心の濃きことなかんずく深紅のバラの花心苦しも  
一輪挿しのデスクの黄バラ饒舌に我を励ます しずかな時間  
われに来て今日で十日目きみたちは元氣だ一本一本の薔薇  
はなびらの縁から萎れゆく薔薇の水替えをして水切りをして

日を継ぎて枯れゆく花を棄ててゆく葉もまだ生きている薔薇  
三週間の一期一会を忘れないありがとう薔薇 ありがとう雲  
蓑 虫 東京 桜井京子

朝かには鱈の子はねて向かうにもここにも水の輪生れては消える  
お願ひと言へばあなたが買つて来る包丁研ぎ器と退屈な日を  
居眠りは低血圧の所為といふ根性なしとぞ思ひてゐしが  
面倒なことはやらないさう言つて蓑虫にでもなりたいたし  
ほんたうにしたきは何であつたのか山茶花散つてのちに思へり  
たいせつなことは言はない頑なに川底の石になつてゐるから  
いつの日かあなたは思ひ出すだらう古切り株を落葉がおほふ  
どれほどを斬られただらう悪役の素浪人にて今日もあらはる

枕 花

横浜 渡 辺 礼比子

ケータイのスイッチ入れて就寝す 今宵なにことも起こりませんよう  
No news is good news. 病院には電話せぬよう医師に告げらる  
「おかあさんが息をしてない」真夜中の義姉の電話が解せぬしばらく  
派手ねえと叱られそうだ姑のためわが調えし枕花はも  
遺影用写真を選らん抽斗ゆ姑の笑顔の零れ出でたり  
黙黙と齋食済ませマスク掛く思い出を語る人もあらなく  
コロナ禍の勢い増せる歳晩に姑を葬りきいたく簡素に  
なにくれとわが父母につきあいしてくれし姑おろそかならず

# 作品一特選



(二月号作品から)

丸山 三枝子 選

## 山の池

東京 朝香 ふさ枝

黒きマスクで顔を尖らす若者が烏天狗のごとく街ゆく  
百余りの石段のぼる足もとの覚束無さよ夫の墓詣で  
夫逝きて三十年経つ墓碑に刻むわが戒名の朱うすれゆく  
底なしの沼とも思う山の池月を映してただにしずもる  
秋晴れのこよなき日差しが山茶花のましろき花を寂しくしたり  
・一首目の新鮮な比喩、五首目の日差しが花を寂しくしたとの把握に共感。

## 一茶忌

習志野 石井 雅子

一茶忌は父の命日俳句より駄洒落上手の父でありしよ  
外出の父はいつもの中折れ帽令和の街に探せど見えず  
急行の通過のあとに虫の音に包まれてゐる各駅停車  
悪い夢見さうなくらい運動して今宵のわれは熟睡したり  
こんなにもイケメンだったか海舟の像を見上げて少し訝る  
・心に触れた身近な素材を作者の世界へ無理なく飛躍させて仕上げる。

## 花

川崎 伊藤 美恵子

くわと鳴きくわとまた鳴き雨の日の夕べ鴉は一羽で鳴いて  
その花は好きになれねどヤブカラシ出会えば寄りてしみじみ眺む  
いつの日かマスク外せる人群れを異様に眺める日の来るらんか  
トルコ桔梗のピンクがほつてり仏壇にあるは悩まし 〝先祖たちも  
菊花賞制して無敗の三冠馬コントレイルを秋は包めり  
・淀みなく結句まで一息に流れる一首目と三首目の氣息の妙を味わいたい。

## 孤食励行

東京 伊藤 康子

薔薇園の映像見つつバラの香のハンドクリーム塗りこんでおり  
手前の駅過ぎれば歌集をおにぎりの隣にしまい職場へ向かう  
行きがけに買いいしバナナが終業を待ちつつ熟す会社のロッカー  
黙々と孤食励行願います大書されおり休憩フロア  
ピンク色の好きな同僚の定年に皆してピンクを身に着けており  
・めまぐるしい職場の時間からさびきびと拘われる日々の陰翳は深い。

## 無造作に

安来 岩田 明美

無造作に甕に挿したる野紺菊ひかりに向かひポーズとりゆく  
暮れ早き十月尽の空に照るきりりと小気味よき満月よ  
秋の陽を噛み砕くがに石榴の実大きく弾け中空にある  
リモートに働く人の手の指の逆剥け映る今宵のニュース  
すつぽりと紅葉被れる一山に向かひて何ぞ叫びてみたし  
・四首目の死角のキャッチ、五首目の内面を突き抜ける思いの強さに注目。

批准国 尾道 岡野 甫江

われと我が驚いてゐる大嚏寒夜の冷えかはたまた誇り

漢字かな文字うつくしき国に住みみな下を向きスマホ操る

批准国五十に入らぬさびしさよヒロシマの空へ何と告げむか

「核の傘」の下にしなれど被爆国被爆者はその中心に居る

この辺り樺の林の照黄葉秋の陽射しに大山掲ぐ

・二首目、四首目には、日本という国に自らが在ることの違和感が匂う。

口ほどに 鎌倉 斎藤 俊子

口ほどにものを言わせて近づきぬ帽子とマスクの間に笑う眼

雨しばしやみたる雲間をわたる月ときの間コロナの輪郭をなす

軒に干す柿に蜂きてしばらくは秋の日ざしを蜂と分けあう

みかん売り場の端に在りてもプライドを高く売らるるシャインマスカット

・四首目のアイロニカルな視線は、人間社会を思わせて膨らむ。

十一月 西宮 鈴木 桂子

早世の父と夫なり人生に若き二つの仏を負ひて

あの巨体あのキヤラあの顔トランプといふアメリカの生みし混沌

風に鳴る枯葉踏みゆく街上に見上げる月はただにうつくし

忘れぬや最期のこゑに(死なない)と 眼すずしく旅立ちにけり

黄に炎ゆるゆりの木に会ふ一本のしづかなる木に神在るごとし

・素材や対象により、文体や表現を自在に変えて読ませる。

予感 福岡 中村 かよ子

いいことがあるかもしれない予感だけ吸ってシートを青空に干す

霧深く常にはあらぬ町ゆけば世迷い人の幾人と会う

霧雨は指の先から忍び込み私と霧の境を失くす

生き残る術の形かうイルスも引つ付き虫も見れば似ており

からからと音のしそうな空の蒼善意で回る世などはなきに

・身に引き付けて詠みつつ、外部世界を捉える独自性が歌を豊かにする。

田屋のネクタイ 東京 西野 美智代

遺されし田屋のネクタイ可惜しと十三本が選られてゆきぬ

五箇山の和紙の小皿に夕されば十一錠の薬のをせる

術後一年小春日のけふ都内では五三四人がうつる

前任は嘘もまことと言ひ包めしどろもどろの後任未だ未だ

処理しろと申し上げたと答弁の防衛大臣のマスクがやばい

・数詞を活かして境遇を詠み、痛快な皮肉で政治批判をする。

白く咲く 倉敷 宮原 迪恵

いくつもの希い(めづ)のあれど来ん年のどれもこれもが淋しき顔す

冷えびえと晴れたるあした山茶花は季節を知りて白く咲きおり

風におう町の外れの草もみじ足裏にふめばやわらかきかな

道の辺のあら草はやも紅葉して村は静かに暮れてゆきたり

ほんとうは備前の壺に挿したきに銚子に活ける狭庭の小菊

・自然への心寄せを緩やかなリズムに乗せて詠み、境涯が滲む。

# 作品二、三特選



(二月号作品から)

千々和 久幸 選

## 〈作品二〉

秋の陽

柏 江口絹代

焼き網で焼きしさんまの臭いして集合住宅の秋の夕暮れ  
あさなさな『たとえば君』に陽があたり時を重ねるわたしと本棚  
「もういいよ、七十年も生きたのだ」リポビタンD飲まないひと日  
おのおのもゆうべはかなき夢を見て朝の卓に寄り合いており  
秋の陽がしんと落ちゆく街道にカンナは赤く人を待ちおり  
はや雪が降りたるカナダの子に送る乾燥芋と手作りマスク  
・どの一首にもウィットに富んだドラマがあつて陰影深い。

月の色

鎌倉 小原裕光

碑の大宅壮一の太き文字(男の履歴書)雨に濡れいる  
長梅雨に宵待草の花咲きぬまだ見ぬ月の色を宿して  
行き交うはマスクを付ける人ばかり人の目を見る人が目を見る  
円覚寺の石段昇る女あり十月の雨に傘かしげつつ  
見下ろせばまさに気ままな羊雲みちのくの山に草を食むごと

久々の友に会わんと改札のマスクの群れに面影探す

・常識の死角に届いた歌に生彩があり、更なる飛躍を思わせる。

やつと自由

千葉 竹本幸子

秋の陽が水平線に沈みゆき彼方の船の航路を照らす  
とりどりの落葉が風とたわむれてやつと自由になれたと燥ぐ  
入社して二ヶ月足らずで辞める人マスクの下の顔は見せずに  
職場では電子化進み冬が来て頭の中はくしゃくしゃである  
ひそやかに夜更けの街を濡らしゆく晩秋の雨を窓に見ており  
ブルームーンの今日はハロウィン魔女たちよ三十八年後にまた会いましょう  
・穏和な歌に奔放自在な歌が加わり、更に歌の幅を広げた。

秋くれやすし

藤沢 牧田明子

変つたのはあなたでなくてわたくしの『記憶のゆがみ』秋くれやすし  
死の際はふはつとあるかシースルーエレベーターに足より浮きぬ  
街路樹の櫻のなかにそよがない青葉はきつと生き難いだらう  
ドライバーのぬない軽トラに伝票の束吹かれつつぐれとなる  
学術会員六名拒否が始まりと後に言はるる時を恐れつ  
民がみなゆるき時代に馴るころ権力の手は蛇口を締めむ  
・一、四首は達者な歌だが、五、六首の時事詠は答を急ぎ過ぎた。

期末テスト

さいたま 松沢みどり

一週間後に期末テストを控えている息子は今日もゲーム離さず  
志村けんのように教えられるがshe her herを子に解説す  
いつものようにご飯をたらふく平らげて笑顔で出かけるテスト当日  
「国語と社会はうまくいった」と言われしが答案見るまで油断はできぬ

銀河のように遠いものだと思いたり息子が平均点を取るのとは  
とりあえず元気でいれればいいのだと思うことにするテストを終えて  
・題材もとることながら、どの歌にも熱情と躍動感のあるのが良い。

学校に着く

東京 大島 昌子

掃除せるあとから舞いくる楓紅葉に庭明るくて間もなく師走  
コロナ禍の冬の夕べを乗り込めばタクシー窓を閉めずに走る  
和歌山と聞けばなつかし和歌の浦文教高女に二年通いき

・歌を支えに黙々として倦まずたゆまぬ努力を買いたい。

### 〈作品三〉

日常 II

川崎 篠 永路子

薦もみじを屋根までまとい板張りの昭和の家は静かに呼吸す  
掌に吸いつくような丸みもつ塗り椀に陽の温もり宿る  
ガラス吹きがきゆうと伸ばして整えし細長き花器天を指しおり

クローゼットの奥より出でし新聞紙コロナの文字のなき記事の並びぬ  
夜道行く路線バスの窓の乗客のだけれどもが物憂げな顔  
・誰もが見落としがちな細部をよく見て破綻なく詠んでいる。

五位 鷺森

取手 田 中 あさひ

麴麴のたぐひのここに到るかど微かにうごくものを見澄ます  
きみらの名なんと五位鷺ふくらかの羽毛のかたまりふたつが眠る  
うらやまをけふより(五位鷺森とよぶ小春日あびて二羽のしづもる  
五位鷺の親仔もわれも死にかはり生まれかはりてここに在るべし  
五位鷺の仔どものねむる朝六時わが裏山をゆりかごととして

・世俗を離れた高みにゆったり遊ぶ「香蘭」では異色の歌。

草の 声

東京 田村 久美

天よりの絹糸のごとく肅々と雨は降りたり大地濡らして  
灰色に煙りたる雨を縫ふやうに小鳥の声はわれに届きぬ  
雨に濡れ芝は緑に輝きてはぢけたる草の声あちこちに  
素直なもの良しと思へり天よりの雨はまつすぐに大地に届く  
次々に形を変へる雲を追ひハンドル回す秋の高速

・比喻と直叙を上手く取合わせたが、四首目の初句は誤植か。

恋にはあらず

行 田 安 田 恵子

いつまでの生か知らねど胸底に燃えつきぬもの恋にはあらず  
ある夜はわれも唄いし「カスバの女」閉店近きスナックより聞こゆ  
おだやかな日々は続かず感情の激しき汝よりしばし離るる  
鉄火肌の名主の女房と達者な祖母が火鉢はさんで話しし昭和  
半玉の時代は語らず遺されし帯に描かれし乱菊が散る

・芝居や映画のシーンを思わせる、懐かしい昭和の残像を詠った異色作。

アサギマダラ

鎌 倉 渡 邊 典子

ものみなの音を鎮めてさざんかの白きが咲けり一条の陽に  
もつれ飛ぶアサギマダラは秋光のかなた大富士目指しゆくべし  
いくばくの幸あるごとし秋ゆふべ声なき路地に灯のこぼれきて  
朝時雨すぎて銀杏の落葉ふむこの道はいつか来た道ならず  
吹き荒れし一夜はあけて空に照る多なる柚子のこのあつけらかん  
・すでに一家の風格を感じさせるが、本領發揮は実はこれから。



# 寒い朝にも

柏原 陽子

入会の因島支部の短歌会の若き我らは初心者ばかり

初めての短歌のモデルは庭先にひっそり咲いた白いタンポポ

誰も来ぬ静かな元旦メールでのおめでとうが降りくる朝

古里は降るほど星が出ていたと夫が呟く凍える朝に

年男の九十六歳まだ元気に牛乳配る三時に起きて

五十年過ぎれば近所も様変わり変わらず商うわが牛乳屋

両隣は夜中にシャッター閉める音 我らは朝の三時に起きる

コロナ禍にも互いに思う気持ちあり賀状に皆の会える日<sup>みんな</sup>を待つ

ひと気なき神社に吾らの柏手が響いて返る冬ざれの森

渦まいて吾に付きくる北風の落葉くるくる背中も押して

この町からコロナ患者の出ぬように願いつつ貼るポスター二枚

ひと言随想

わが町<sup>ホタルガイケ</sup>蛍池

人は人自分は自分と身の丈にあいたる生活続けてゆかん

リモートと知らぬ間にとび入りの九十六歳は疑問符だらけ

世の中の進歩すさまじ古里のないないだらけの昭和懐かし

まだ重い辞書を時には開きつつ短歌詠みおり締切りまぎわ

結婚して蛍池に住んで四十年以上になる。

その間大きな地震があったがどうか生きて  
いる。田畑やため池があり自然があった。牛  
乳を配っていると狸が出てきたり狐が走っ  
ていて、知人は野兎を飼っていた。故郷因島で  
は見た事のないでき事だった。子供はザリガ  
ニやカブトエビをとってきた。

だんだん開発が進み、里山もなくなり鶯の  
声も今はない。母を恋しと鳴いていた山鳩の

声も聞けなくなった。

駅もきれいになりモノレールも走るようにな  
った。大阪空港も歩いて二十分の所にある  
が、数回しか飛行機には乗っていない。便利  
とひきかえに自然が失われていくのは寂しい  
事だ。我が家のまわりにも新しい建物がいつ  
ぱいできた。昔はきつと名前のように蛍がいっ  
ぱい飛んでいたのであらう。残された池に亀  
が甲羅干しをしている。

中休みの一日

千々和久幸

気促で横着な旅

まこと気促な、そして横着な旅を続けている。気促と言うよりも気紛れなと言った方がいい。気促で気紛れなのは、この旅に明確な旅程を持っていないということだ。また横着なのは村野次郎に寄り添う振りをしながらその実、寄り添い方が上辺を撫でただけで終わっていることによる。慙愧に堪えないが、いまさら旅装を新しくすることも行く先を変えすることもしない、億劫だから。

毎月一回、一日だけの旅である。締切日を睨んでの月一回の執筆時間は、一日で脱稿出来る範囲に留めている。そしてその一日の実働は朝から書き始めて昼過ぎに終わることもあれば、夕方の晩酌前まで掛かる事もある。が晩酌後まで持ち込んだことはない。

時間が掛かるのは、村野先生の作品が刻々

の時事に依拠して詠われているからである。例えば加賀百万石宝展を見に行ったりとか、石橋湛山氏が首相に就任したとか、チリ沖で大地震があったとか、銀座で建設工事中に小判が出てきたとか、駐日大使にライシャワー氏が任命されたとか、東京オリンピックが開催されたとかの他に、杉浦翠子氏や吉植庄亮氏の逝去、ボルシヨイ・バレエの来日、誘拐犯の逮捕、内外の旅行詠、選歌、歌会等々の模様が縦横に詠われているからである。

このような作品は現場に居合わせないと感動が薄い。そこで資料によって内容を確かめ霧囲気を感じ取ることになるが、これにはけっこうな時間を要する。幸い今は簡単にネットを利用出来るが、これが真実とは限らないから悩ましい。本来なら当時の新聞をチェックするのがオーソドックスな方法だが、わたしの旅はその部分はスキップ（手抜き）して現

在の視点を軸足に書き継いでいる。

研究者や史家ならば、こんな摘まみ食いな読み方は許されまい。そうでなくとも作品は詠われた時代と作者の置かれた立場に即して読まなければならない。もし万葉集を現在の眼だけで読めば、理解はその範囲内に留まることになる。それでは真に万葉集を読んだことにはなるまい。

今一つは歴史的仮名遣いの煩わしさ、である。いや煩わしいなどと軽々しく言ってはなるまい。その時代を詠んだ（記述した）歌や文章は、その時代の仮名遣いで読んでこそ味わいの出るものである。そのことは十分承知しているのだが、わたしの旅はそこも中途半端なフォローしか出来ていない。

誤植とパソコン

わたしは一連の文章をパソコン（一太郎）で綴っている。ついでに言えば短歌もパソコンで仕上げる。さすがに出先までパソコンを携帯する根性はないが、今のところ弊害より恩恵の方が多い。弊害とまでは言わないが、困るのはパソコンには旧字体の内蔵が限られ

ていることである。内蔵されていたとしても、それを採し出すのに略字の倍は掛かる。

この旅でも「地上巡禮」や「ザムボア」は旧字体が多く使われているから、引用には手間が掛かった。そしてその後は地の文にも旧字が紛れ込んでくる。ここまでの記述で十分お解りのように、この旅は素手で行く身軽な旅である。だから曰く因縁、故事来歴への目配りは最小限に留め、事柄の背景には深入りしない。興味のある事柄はともかく、気分で気紛れなりに短時間で村野次郎の生涯を駆け抜けることが目的である。横着な読者と言われれば、一言もない。

さらに言えば引用あるいは参照する「香蘭」誌の誤植の多さである。校正者が素人であることは言い訳になるまいが、主宰者の名前や作品のタイトル、引用歌（文章）にも誤植が散見するのはどうしたことか。文法上の間違いも気になるが、それは言わない。

一般論で言えばこれは指導者（主宰者、編集責任者）の考え方に負うところが大きい。結社には一人や二人、文法に詳しい会員や誤植に厳しい会員が居るものだが、わが「香蘭」は皆善い人ばかりで所謂うるさ型の会員は居

なかったらしい。だから良く言えば大らか、悪く言えば無神経ということになる。

これは現在でもあることだが、選評を書くときに引用歌に誤植があった場合はどうするか。誤植を訂正して引用しその上で選評を書くというのは親切のようだが、わたしはその立場を採らない。一々「ママ」と注書きをするのも止める。原文のまま引用し、原文に添って評を書く。なぜなら誤植のあることを周知させたいからである。そこを丸めて仕舞えば誰も誤植に気づかず、以後も誤植は再生産されるだろうから。

### 振り返らない旅

現在、書き継いでいる「次郎への旅」は著者も校正することになっているが、雑誌になつてしまったものは読み返さない。だから発刊後の誤植はそのまま残し、重複する記述も出てくる。しかし訂正記事を出したり、断りを言うことはない。そんな不都合な箇所も含めて、書いたものはすべて著者が背負っているものだ、というのがわたしのささやかな美学である。もの書きにはこんな怪我は付きま

のだし、オトコ（女性でも）には瘦せ我慢も必要だと自らを欺いている。むしろ単行本にする時は別儀である。

はじめて書くが、実はわたしの作品が（作者の立場からすれば）誤読されたことがある。作品では、酒場などで客の求めで歌い歩く芸人の「流し」が、調理をする「流し」場と間違えられ、歌集評では帯に書いた自己批評まがいの「韜晦の歌人」が「倒壊の歌人」と読まれて活字になった。

これには驚きひっくり返って倒壊したのだから、評者に先見の明があつたと苦笑せざるを得なかつた。ごく最近の話で、周辺では知る人ぞ知る裏話である。

いずれにしろ過ぎたことは振り返らない。後悔を次のステップの糧にするなどという洒落臭い（優等生的な）発想はない。水の流れるごとく時の過ぎ行くごとく、流れるに委せ過ぎゆくに委ねるにしくはない。

中休みの一日は終わった。さりながら気分で気紛れで、そのうえ横着な「村野次郎への旅」の終着駅はまだ見えない。袖振り合うも多生の縁、拍手があるうとなかろうと、今しばらくは出たとこ勝負の風を信じて歩こう。